



Title	『和泉式部日記』の作品構造について：テキストの思考要素と発話要素の分析から
Author(s)	上田, 恭寿
Citation	大阪大学言語文化学. 2005, 14, p. 171-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77913
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『和泉式部日記』の作品構造について
ーテキストの思考要素と発話要素の分析からー*

上田 恭寿**

キーワード：テキストの思考要素と発話要素、3段階の移行構造、2重の客体化

The *Izumi Shikibu Nikki*, which is thought to describe Izumi Shikibu's real experiences, exhibits a few somewhat unfamiliar aspects as a diary, so that arguments have been made that this work itself was prepared or some portion of it was inserted by someone other than Izumi Shikibu at a later date.

This thesis discusses these unfamiliar descriptions from a structural point of view through the analysis of the text. The text was analyzed focusing on two elements of the text entries, "thoughts" and "utterances", to identify the "thinking subject" and the "uttering subject" of each text entry respectively. The study of the structure was pursued based upon the novel structure model presented by Leech and Short, which assumes a hierarchical structure composed of several "speech-levels." A "speech level" is here considered to be a "joint activity" between dialogists, as presented by Clark.

Through the discussions, the following findings have been obtained:

- 1) The characteristic inner description text was extracted, where the "utterance subject" is identified as the narrator, while the "thought subject" is not identified definitely between the narrator and the main character, as if both remained one and the same together.
- 2) This inner description text indicates a newly created speech-level, a so-called "merged speech," corresponding to this text. This new speech-level subsequently indicates a new structure creation ("diary-narrative structure").
- 3) The *Izumi Shikibu Nikki* as a whole is understood to be composed of 3 successive structures: a "diary structure" at the beginning, followed by the coexistence of a "narrative structure" and a "diary-narrative structure", and then eventually

* An Approach to the Structure of the *Izumi Shikibu Nikki* through the Analysis of Thought and Utterance Elements in the Text (UEDA Yasuhisa)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

a “report structure.” This 3-stage-structure is recognized as reflecting the re-objectification of its main character.

- 4) In consideration of the view of the history of Japanese writing, this characteristic inner description text could be given an important role, that is, to receive the lineage from the *Ise Monogatari* texts of the previous era and to induce a leap to the subsequent rich narrative texts as observed in *The Tale of Genji*, the verification of which should be the subject of further study.

1 はじめに

『和泉式部日記』は、和泉式部自身と冷泉院の皇子である敦道親王との間に実際にあった恋愛の回想を綴る、式部自身による作品とされ、内容としては、親王の最初の接触から、「女」と述べられる彼女が親王の邸に入り、親王の北の方が邸を出るところまでの顛末を描く。敦道親王は式部が親王邸に入ってから間もなく亡くなり(1007年)、式部は中宮彰子の許に出任することになるが(1009年)、その時に道長をはじめとする人々の関心に応えるところがあって作品が作られたものではないかとされる(藤岡 1989)。それに従うと、作品成立は1009年以後の、敦道親王との艶聞がまだ人々の記憶に残る数年の間と考えられる。

従来よりこの作品の最大の特徴は叙述にあるとされ、それは次の3点にまとめられる：

- 1) 日記であつたら、作者の目の届く範囲を超えないはずなのに、主人公の見聞の外まで経験性を持って書かれていること(鈴木 1983: 10)。
- 2) 日記であつたら、自記的第一人称を取るのが普通なのに、主人公を第三人称に扱っていること(鈴木 1983: 10)。
- 3) しかも、主人公に対する第三人称的叙述が不徹底で、主客未分の、第三人称ともつかず第一人称ともつかぬ叙述が見られること(鈴木 1983: 10, 49)。

このため、実際に「日記」、「物語」という2つの呼び方が鎌倉時代頃には並行して使われていたらしく(藤岡 1984: 113)、また、4系統ある写本のうちの2系統に『和泉式部物語』の題目が見られる(鈴木 1983: 17-18)。学界においても、後代における他作説や挿入説が提出され、それをめぐる活発な議論が交わされている。

本論は、作品テキストの分析を通じて作品構造の観点から、この叙述について論ずるものである。以下、3章でこの叙述に関する代表的な研究を示すが、まず2章で作品構成と叙述についての確認を行い、そして、4章で本論でのテキストと構造の分析方法を提示し、5章と6章でその方法に従ったテキスト分析と構造分析を行う。最後に、7章

でまとめと今後の課題について述べる。作品テキストは現存する最古の書写とされ、また他系統より原形に近いと想定され、且つ、誤脱も少なく、文意も通じやすいとの高い評価が与えられている（藤岡 1984：126-127）三条西家本を底本とするテキスト（藤岡 1984）を使用する。

2 作品構成

作品は次のように始まる。ここには主語の明示はないが、渡辺実の指摘にもあるように（2000: 183）、主語を1人称とする日記テキストと了解するのが自然であろう（以後、引用テキストとページ数は藤岡（1984）による）。

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。（p. 11）

この後、この日記の書き手と小舎人童との間のやり取りがあり、そして、小舎人童が日記の書き手より託された歌を宮邸に戻って宮に渡す場面がこの場面に続いて現れる。ところが、この場面は日記に記される内容と時間的に連続した出来事であるのに、見聞外であるはずの宮の様子が次のように経験性を持って描かれる。

（宮が）まだ端におはしましけるに、この童かくれのかたに気色ばみけるけはひを、ご覧じつけて、「いかに」と問はせたまふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、（略）（p. 12）

さらにその直後に宮がこの日記の書き手と思われる人物を訪れる際、次のように、その人物は「女」という3人称で描出される。その後、この人物は宮を含む他の作中人物と同様に、「女」という3人称で叙述され続ける。1章の3）で示した「第三人称ともつかず第一人称ともつかぬ」と指摘される叙述は本作品の大部を占めるこの部分に見られる。この部分のテキストについては、本論の主要部である5章のテキスト分析において詳しく示す。

（宮が）あやしき御車にておはしまいて、「かくなむ」と言はせたまへれば、女いとびなき心地すれど、「なし」と聞こえさすべきにもあらず。（p. 14）

そして作品の最終部に、「女」が宮の邸に入ったために、姉である帝の女御のよこした車で宮の邸を去ろうとする北の方と宮との間のやり取りの途中に、唐突に、「宮の北の方の御文面や女御殿の御言葉はこんなものではあるまい、作者の作為による作り書きらしいと、私の書写した元の本に書かれている」という、この本の書写者によるように思われる言葉が現れて、作品は締めくくられる。

宮は入らせたまへば、さりげなくておはす。「まことや、女御殿へわたらせたまふと聞くは。など車のこともたまはぬ」と聞こえたまへば、「なにか。あれよりとてありつれば」とて、ものものたまはず。

宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらじ、書きなしなめり、と本に。

(p. 66)

作品構成としては、このように1人称叙述（冒頭部）から、本文の大部分を占める、日記の書き手と思われる人物に対する3人称叙述（3人称叙述部）へ、そして最後の書写者による叙述（最終部）へという、3つの部分より成る。

3 叙述に関する代表的研究

叙述に関する最も代表的な研究としては、自作説を支持する鈴木一雄の議論が挙げられる。彼は、見えないはずの宮の様子や主人公の三人称叙述は、全知の視点ではなく、日記の書き手の視点の枠を少し超えた、宮と自身という限られた部分についてのみ見通す、この作品に特有の「超越的視点」によるものであるとする。また、「第三人称ともつかず第一人称ともつかぬ叙述」について、「作者の心理的秩序」に沿った「主体の転換」によるものであるという説明を行う。それぞれについて、鈴木は次のように述べる（1983）：

- ・（略）「女」からは見えないその“影”の部分、心にかかってしかたがない帥の宮のうしろの“影”の部分に、「女」の視角をはなれ反対側から照明を与えたにすぎない。物語類の超越的視点は、むしろ全知的視点ともいうべきもの、あらゆる角度から照明をあてる自由をもつ。（p. 50）
- ・（略）三人称とも一人称ともつかぬ叙述ということは、見かたをかえれば作者の心理的秩序を根底とし、その秩序にそって自由に主体の転換がおこなわれてゆく書きかたといえるものである。（p. 49）

つまり、「超越的視点も、第三人称的叙述の問題も、ともに作者の主体変換の自由さが根底である」（p. 480）として、全知の視点とは異なる「主体変換の自由さ」にその叙述

の根拠が認められている。そしてこの「主体変換の自由さ」の源泉に式部の創作姿勢があると、鈴木は次のように指摘する。

- ・この主体転換の自由は、おそらく和歌の発想のしかた、形象のしかたに関係すると思われる。和泉式部のように、作歌できたえ、するどい感性をみがきぬいた歌人の場合には、抵抗のない、自由な叙述態度ではなかったか、と思う。

(p. 50)

鋭い指摘ではあるが、論としては、「主体変換の自由さ」という叙述方法と和泉式部の創作態度との関係を読み解くという研究態度によるもので、構造についてはいわばそれをスキップした論じ方である。叙述に関する従来の議論は、他に例えば挿入説を支持する守屋省吾(1988)等の議論があり、それぞれに鋭いものではあるが、この議論と同様、作品構造と関連付けた議論は行われてはいない。

4 テキスト分析方法と作品構造分析方法

4. 1 テキスト分析方法—思考主体と発話主体の吟味

「テキストは発話による思考の表出である」という基本前提を設け、テキストに思考と発話という2つの独立要素を認める。要素の独立性を認める立場に立てば、両要素についてその主体を考えたとき、テキストにおいてそれら2主体が一致するとは限らない。例えば、「みなしづまりぬるけはひなれば、かけがねを心みにひきあげ給へれば、あなたよりはささざりけり」というテキスト(『源氏物語』『帚木])の下線部、「あっちの方からは鎖されていなかった」と思考する主体は源氏と考えられるが、その発話主体については、源氏とすることも不可能ではないが(両主体が一致する心内文)、下線部の前からの読みの連続性よりは、語り手とする方が自然ではないかと思われる(両主体は不一致)¹⁾。

本論では、この立場で、思考主体と発話主体について、テキストが誰の発話によるのか、そしてテキストに誰の思考が反映されているのか一つ一つのテキストを吟味する。

¹⁾ なお、Clark (1996: 20-21) では、Goffman による author, principal, animator と同様の概念として formulator (発話されるテキストの作成者), principal (言葉により発話表出される意図の主体であり、発話責任を持つ、発話の“I”), vocalizer (物理的な発話の箱) の概念が紹介されるが、これによると、下線部のように2主体が異なるとされるとき、vocalizer は語り手、principal は源氏とされるのではないかと思われる。しかし、心内文についても同様に考えられ、両タイプの区別を行うには、心内文について、vocalizer (語り手) による principal (源氏) の声の模倣というような条件を付加して区別する必要がある。結果的には同じことになろうが、区別の効率性だけでなく、物語テキストを考える際には、本論の分析が有効であると考えられるが、それについてはあらためて論じたい。

4. 2 構造の分析方法―「談話レベル」による階層構造としての作品構造

小説の構造について、Leech と Short は次の図の左側にあるような、左右の主体者間で「伝達情報」のやり取りが行われる、複数の「談話レベル」による階層構造モデルを提出する(2003:168, 172, 178, 179)。図で上位にある談話レベルは下位の談話レベルを関知し、それを支配し、従って3人称による語りが行われるが、逆に下位の談話レベルが上位の談話レベルを関知することはない。また、ここでは Booth の考えが援用され、テキストと実際の作者の間にあって、実際の作者に代わって文学情報を発信する「含意された作者」(implied author) と実際の読者とテキストとの間にあってその文学情報を受信する「含意された読者」(implied reader) とによる談話レベルが、(実際の作者―実際の読者)間の談話レベルの下位に設けられる²⁾。一方、日記作品の構造は、図の右側に示されるような、日記作成者が自身に向かって語る談話レベルによる構造であるとする。本論では、「物語構造」を「小説構造」と同等のものとし、そして、「談話レベル」に注目した構造分析を行う。ここで示される「談話レベル」は、Clark によって議論されるような、対話者間の「共同行為」であるとする(1996)³⁾。6章の6.1で行う構造分析においては、この階層構造モデルに加え、「共同行為としての談話レベル」を重要な概念として用いる。

図1 小説構造と日記作品構造

小説に内包された談話レベル階層	日記作品における談話レベル階層
(実際の作者―実際の読者)	(実際の作者―実際の読者)
(含意された作者―含意された読者)	(含意された作者―含意された読者)
(語り手―対話者)	(日記作成者―日記作成者自身)
(登場人物―登場人物)	

5 テキスト分析

5. 1 冒頭部と最終部のテキスト

上記の2章に示した3つの部分のうち、冒頭の日記部分テキストの思考主体と発話主体が「女」であること、また最終部テキストの思考主体と発話主体が書写者であることは明らかであろう。

²⁾ Booth(1961)では、それぞれ”implied author”(70-76)、“mock reader”(138-139)とされる。その日本語訳(1991)では「内在する作者」(101-108)、「擬似読者」(179-182)とされる。

³⁾ Clark は対話動作(communicative act)とは話し手の信号(signaling)と対話者の認識(recognizing)より成る双方向の参加動作(participatory act)による共同動作(joint act)であり、談話とは対話動作を含む一連の共同動作より成る共同行為(joint activity)とされる。そこで伝達されるのは話し手の意味であり、それは Grice の言う「意図」(meaning intention)のことであるとされる(1996: 125-133)。

5. 2 「女」という3人称が観察される部分のテキスト

作品の大部分を占めるこの部分には2通りのテキストタイプが認められる。1つは例えば次に挙げるような、出来事や作中人物の行為や様子を描出するテキスト、あるいは、宮を含む、「女」以外の作中人物の思考を描出するテキストに見られるタイプである。後者では「とおぼす」や「と思ふ」というように、その思考は行為として語り手によって対象化されて描出される。それらの思考主体、発話主体はともに語り手であると判断される。

(1) 晦日の日、女、

ほととぎす世にかくれたる忍び音をいつかは聞かむ今日もすぎなば
と聞こえさせたれど、人々あまたさぶらひけるほどにて、(宮は)え御覽ぜさせず。
(p. 17)

(2) (宮は)思ひがけぬほどに忍びてとおぼして、昼より心設けして、日ごろも御文とりつぎて参らす右近の尉なる人を召して「忍びてものへ行かむ」とのたまはすれば、さなめりと思ひてさぶらふ。 (p. 14)

もう1つは、「女」の内面表現テキストに支配的に観察される、思考主体の同定において語り手と「女」との間の不確定性、あるいは両者の重なりが認められるタイプである。

「女」の内面表現が「思ふ」を伴うこともあるが、そのとき、次のように、「思ふ」は終止形ではなく、後続事態との関係が話題にされる、「思ふ」行為自体に焦点が当てられる表現となる。

(3) 宮、例のしのびておはしまいたり。女、さしもやはと思ふうちに、日ごろのおこなひに困じて、うちまどろみたるほどに、門をたたくに聞きつくる人もなし。 (p. 18)

「女」の内面が注目される、「女」の思考が浮かび上がるように見えるテキストはほぼすべてこの不確定性が認められるタイプである。紙幅の関係から以下に2例のみを示す。

1例目は、上記2章でも示した、初めて宮が「女」の家に現れた場面でのテキストである。この場面は「女」が宮の突然の訪問に驚きながらも宮を迎え入れる場面で、宮の優美な姿が初めて紹介される箇所でもあり、作品の最初のクライマックス部分でもある。

(4) あやしき御車にておはしまいて、「かくなむ」と言はせたまへれば、女いとびなき心地すれど、「なし」と聞こえさすべきにもあらず。昼も御返り聞こえさせつれば、あ

りながら帰したてまつらむもなさけなかるべし。ものばかり聞こえむと思ひて、西の妻戸に円座さし出でて入れ奉るに、世の人の言へばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。 (p. 14)

最初の下線部は、「ありながら」から下線部の後続く「聞こえむ」(申し上げよう)までを「思ひて」による引用内容として、その発話主体を「女」とすることも可能ではあるが(心内文)、下線部の前の部分、「女いとびなき心地すれど」で、三人称の「女」と発話する発話主体は語り手と判断するのが適当であろうと思われるので、その部分との読みの連続性からは、発話主体は語り手とするのが適当ではないかと判断される。また、思考主体については、下線部の前の部分が「女」や、「心地すれど」と対象化されていて、その部分の思考主体は語り手とされるのが妥当であろうから、下線部がその部分との間で文が切れていない点を考えれば、語り手とするのが適当かもしれないが、「くなし」と聞こえさすべきにもあらず(いないなどと申し上げることはできない)という内容には、宮の訪れに対する「女」の気持ちの表出を見てとることも十分に可能ではあろう。又、「なさけなかるべし」(思いやりのない仕打ちであろう)についても、語り手と「女」の両方の思考の可能性を見て取ることができるであろう。即ち、下線部には語り手と「女」の間の思考の不確定性、または重なりが観察される。そしてそのとき、両者の思考内容は一致したものである。

後の下線部テキストの思考主体も、「なまめかし」(優美で魅了的である)を、宮の姿を見た「女」の思考の発露とも、又一方で宮に対する語り手の観察(思考)内容であるとすることもできよう。そしてその思考内容は一致したものである。発話主体については、この引用部分の最初からの発話の連続性の観点よりは語り手と判断するのが適当かと思われる。しかし、「女」の発話であるとするのもまったく不可能ではないようにも思える。このことに関しては7章で触れる⁴⁾。

つまり、この両下線部テキストは、発話主体を語り手とし、思考主体は語り手とも「女」とも取れる思考内容が「と思ふ」を伴わずに描出され、そして両者の思考内容は一致していて、そこに「女」に対する語り手による意味の含みといった、語り手の思考の付託は認められない。語り手の思考の付託が認められないということは、この作品より前の時代の『伊勢物語』の例えば第四段の、次のようなテキストと比較するとき、その内容が明らかになろう。これは、男の通っていた相手の女が他所にいつてしまった後に、男

⁴⁾ 平安朝の仮名文学作品においては、一般に、語り手や作中人物間に社会的な、また個人的な口調の差はなく、発話主体は文脈やテキストの前後関係によって同定される。例えば『源氏物語』では発話主体の同定においても、語り手と作中人物の間での不確定性、または両者の発話の重なりが多く見られる。

が、女が元に居た所を訪れ、女への思いを募らせている場面である。

(略)又の年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひていきて、立ちて見、みて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

下線部の発話主体は語り手と判断されるが、「似るべくもあらず」と思考するのは男とも語り手とも取れるであろう。従って、思考主体に語り手と男との間の不確定性や重なりが観察されるのだが、しかしここでは語り手の思考には情景に対する観察と同時に、男を観察する眼、例えば男に同情する眼も認められる。男の思考内容を客体化し、それに対して加えた語り手の意味の含み（意図）を認めることができる。後に6章で議論するが、対話者に対する語り手の意味の含みは、(語り手－対話者)間における共同行為としての談話レベルの存在を意味するものである。しかし、上記のテキストにはこのような、対話者に対する語り手の意味の含みが観察されず、(語り手－対話者)間の共同行為としての談話レベルの存在が認められない。

もう一例は、「女」が宮の申し出に従って宮の邸に入るかどうか思案に暮れている時に宮が「女」の邸を訪問する場面のテキストで、「女」の邸の庭先で宮と「女」との間で共同で歌が創られながら、両者の愛が頂点に達しようかとする、本作品の一番のクライマックス場面である。

(5) 前近き透垣のもとに、をかしげなる檀の紅葉のすこしもみぢたるを、折らせた

まひて、高欄におしかからせたまひて、

言の葉ふかくなりにはけるかな

とのたまはすれば、

白露のはかなくおくと見しほどに

と聞こえさするさま、なさけなからずをかしとおぼす。宮の御さまいとめでたし。御直衣に、えならぬ御衣、出だし桂にしたまへる、あらまほしう見ゆ。目さへあだあだしきにやとまでおぼゆ。(pp. 46-47)

最初の下線部に「なさけなからずをかしとおぼす」と、「女」に対する宮の思考が語り手によって対象化され、行為として描出される。それに続く「宮の御さまいとめでたし」

は、その宮の思考と対照させられた、宮の様子に対する「女」の思考内容の描出と考えるのが適当ではあろう。透垣と檀の紅葉という情景、さらには宮の思考行為を地にして「女」の思考が図のように浮かぶ。しかし、一方で語り手の観察した内容（思考）の滲出を認めることも不可能ではないであろう。即ち、思考主体に語り手とも「女」とも断定できない不確定性が認められる。そして、両者の思考内容は一致したものである。この部分では、宮の思考は行為として対象化され、一方、「女」の思考は語り手と一体化して描出されていて、両者の内面表現テキストタイプが同一箇所では対照的に観察される。

以上のようにこの部分には、発話主体と思考主体が共に語り手と判断されるテキストと、また、「女」の内面描出において支配的に見られる、発話主体は語り手であるが思考については語り手の思考と「女」の思考とが不確定、あるいは、あたかも両者の思考が一体化するような、特徴的な内面表現テキストが観察される。1章の3)で鈴木が「主客未分の、第三人称ともつかず第一人称ともつかぬ」と指摘する叙述の例に、実は上記の(4)のテキストが挙げられており(鈴木1983:85, 95)、彼の指摘する叙述とはこのテキストタイプを指すものと理解される。そうすると「主客未分の、第三人称ともつかず第一人称ともつかぬ」という内容は本論の分析方法によると、「語り手と〈女〉との間に思考主体の不確定性が観察されるテキストのこと」としてより分析的に説明される。

この、本作品に特徴的と思われる後者のテキストの意義については後の7章で触れるが、次にこのテキスト分析結果から4章に述べた方法に従って作品構造の分析に移る。

6 作品構造の分析

6. 1 3人称叙述部における2構造の並存と作品全体としての3段階の移行構造

5章の5. 1のテキスト分析結果を4章の4. 2の分析方法に照合してみると、思考主体、発話主体が共に「女」である冒頭部テキストは(日記作成者—日記作成者自身)間の談話レベルに対応し、構造としては図1の右側の「日記作品構造」(以下「日記構造」)と認めることができる。

また書写者による最終部テキストに対応する談話レベルは、(書写者—書写者の対話者)間の談話レベルとみなされる。その構造は、それまでの部分の談話レベルの上位に(書写者—書写者の対話者)の談話レベルが設けられた、「伝聞構造」とも呼ぶべき構造とみなすことができるであろう。

そして、これらの間にある、「女」という3人称叙述が認められる部分には、5. 2で分析したように、2つのテキストタイプの並存が認められるが、それは談話レベルに注目するとき、2つの構造の並存を意味する。即ち、「女」の行為や様子、情景、出来事の

描出や、宮を含む「女」以外の作中人物の内面表現テキストには、語り手がその対話者に語り手の意図の伝達を行う、(語り手－対話者)間の談話レベルが対応することが認められ、それを包摂する構造は、図1の左側の小説構造と同等の、「物語構造」を示すと了解される(5.2参照)。そして、もう一方の、「女」の内面表現に支配的なテキストタイプにおいては、語り手の思考は「女」の思考と一体化し、「女」に対する語り手の意味の含みは認められず、そこに対話者に対する語り手の談話意識は認められない。談話レベルとしては、発話は語り手によって行われてはいるものの、思考上は、(語り手－対話者)間の共同行為としての談話レベルが消失している。言い換えると、図1の左側の(語り手－対話者)の談話レベルが消滅し、それに代わり(「女」－自身)間の「女」の意識に語り手の発話が融合した、新しい「融合談話レベル」とも呼ぶべき談話レベルの創出が認められる。それは、構造としては、いわば日記作品構造と物語構造が融合された「日記－物語構造」とも言うべき構造である。このように、この部分には「物語構造」と「日記－物語構造」の2つの構造の並存が認められる。

従って、上記の構造分析の結果を合わせると、作品全体は、「日記構造」から「2つの構造の並存」へ、そして「伝聞構造」へという、「3段階の移行構造」を持つと結論付けられる。

6.2 「女」に対する客体化志向の表出としての3段階の移行構造

3段階の移行構造は2つの移行過程を含むが、最初の移行では日記構造における(「女」－自身)間の談話レベルの上位に(語り手－対話者)間の談話レベルの設置が試みられるものの、思考上は、語り手は「女」に一体化し、即ち「融合談話レベル」(6.1)が並存するため、(「女」－自身)間の談話レベルを完全に支配し切れず、2度目の移行によって、2つの談話レベル両方の上位に(書写者－対話者)間の談話レベルが設置されることにより、2つの談話レベルがもろともにそれに支配される構造に至る移行過程として理解することができる。つまり、2つの移行過程は、それぞれ移行前の構造の談話レベルの上位へ、それを支配する新たな談話レベルの付加の試みと理解される。それは、「女」について見れば、「女」に対する2重の客体化の試みと捉えることができよう。客体化することのない1人称表現(日記構造)から、「女」の行為に対する語り手の3人称表現による1次の客体化(物語構造)へ、但し、そこではまだ「女」の内面において「女」と語り手の一体化による「日記－物語構造」が並存し、その後、「女」と語り手がもろともに書写者により客体化される2次の客体化(伝聞構造)が行われるという2重の客体化である。これは、「女」が語り手と「女」に分裂しながらも、「女」の内面は語り手によって客体化されず、語り手と「女」は思考上の一体化を続け、最後に書写

者によって両者もろともに客体化される図式として捉えることができるだろう。即ち 3 段階の移行構造の裏に、「女」に対する客体化志向の表出が認められるのである。談話レベル、移行構造、「女」の客体化は次図のように対応付けられる。

図 2 3 段階の移行構造と 2 重の客体化

(冒頭部)	(「女」と叙述される部分)	(最終部)
談話レベル：(「女」-「女」自身) → (語り手-対話者) / (融合談話)		→ (書写者-対話者)
移行構造：日記構造	→ 物語構造 / 日記-物語構造の並存	→ 伝聞構造
「女」の客体化：「女」	→ 語り手と「女」に分裂(ただし行為 → 書写者による両者の客体化は客体化されながらも内面は未客体化)	

ちなみに、このように考察を進めてくるなら、作品構造の企図は「含意された作者」による文学情報の一部と考えられるので、「含意された読者」を包摂する「実際の読者」に注目する Miller の議論に準ずると (1981)⁵⁾、あるいは最終部は本当に、後代の「実際の読者」(書写者)が読みを進めながら、「含意された作者の対話者としての含意された読者」として、女の内面に対する客体化の未完遂事情に立ち会い、そこで、「含意された作者」の意図を汲んで、彼に成り代わって、書き足したものかもしれないと考えることもできよう。

7 まとめと課題

1) 『和泉式部日記』のテキスト一つ一つについて思考要素と発話要素に注目した分析の結果、発話は語り手でありながら思考において語り手と「女」の一体化が観察されるという、特徴的な内面表現テキストが抽出され、そこから、3 人称叙述部に「物語構造」と「日記-物語構造」の 2 構造の並存が確認された。このうちの「物語構造」が、見聞外の経験の叙述 (1 章の 1)) や主人公の三人称叙述 (1 章の 2)) を現出させ、一方、「日記-物語構造」が、作品に特徴的な、「主客未分の、第三人称ともつかず第一人称ともつかぬ叙述」(1 章の 3)) を現出させたと理解できる。「物語風であろうとして徹しきれなかった」、「和泉式部物語と呼ばれながら、ついに和泉式部日記である」(渡辺実 2000: 184, 205) との指摘も、この「2 構造の並存」によるものであると理解される。

さらに、作品全体としては、「日記構造」から「物語構造」と「日記-物語構造」の並

⁵⁾ Miller は、ドストエフスキーの『白痴』の分析において、「語り手の対話者としての読者」(narrator's reader)を設定し、「実際の読者」は「含意された読者」と「語り手の対話者としての読者」を包摂し、「実際の作者」の意図 (ideas) を移植 (transplant) するとする、「実際の読者」に力点を置く読者論を展開する (1981: 164)。

存、そして「伝聞構造」へという3段階の移行構造であることと、それが「女」に対する2重の客体化志向の表出であることが演繹された。作品全体の構造の裏に「女」の客体化志向の認められることは、この作品がそれを志向した一人の作者、和泉式部によるものであるとすると、この客体化志向は何によるのか、なぜ2重の客体化を行わざるを得なかったのか、作品主題や実際の作者の意図、制作姿勢についての考察が次の課題とされるが、これは、本論の当面の目的である作品構造分析の延長課題として別の機会に譲ることとする。

2) 本作品の前の時代の『伊勢物語』の内面表現において観察される、作中人物を客体化し意味の含みを加える語り手の眼が認められるテキストと、本作品に続く、例えば『源氏物語』のテキストを考えると、本作品に特徴的なこの内面表現テキストは文章史上の重要な示唆を与えるのではないかと思われる。思考主体についての語り手と作中人物の間との不確定性や重なり、さらに本テキストにおいても一部認められる、発話における両者の不確定性や重なり(5章の5. 1の(4)のテキスト例の分析内容参照)は『源氏物語』において多くの作中人物の内面表現テキストに対して用いられ、その特徴が縦横に発揮されていると考えられるからである。『源氏物語』のテキストにおいて実現される、作中人物と語り手との間の思考と発話の自由な移動は、この作品とはもう一步だけの違いのように思われる。それはまた『伊勢物語』に始まる歌物語の系譜を引きながら、日記文学ジャンルをくぐって、そしてその最後に『和泉式部日記』における語り手と主人公との思考における一体化という経験からさらに飛躍し、物語にふさわしい新たな内面表現の獲得へたどり着く道筋ではなかったかと思われる。この事情についてのテキストの2要素分析による検証は今後の課題としたい。

主要参考文献

- 糸井通浩・高橋徹編『物語の方法』世界思想社 1992
伊藤博「日記と物語とのあわい」『国文学 10月号』学燈社 1990
——『和泉式部日記研究』笠間書院 1994
木村正中『中古文学論集〈第四巻〉土佐日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記』おうふう 2002
鈴木一雄・円地文子『全講和泉式部日記』至文堂 1983
鈴木一雄『王朝女流日記論考』至文堂 1993
藤岡忠美「作者の肖像」『王朝女流文学必携』秋山虔編 学燈社 1989
三谷邦明『物語の方法 I』有精堂出版 1989

森田兼吉「成立」『王朝女流文学必携』秋山虔編 学燈社 1989

守屋省吾「『和泉式部日記』私考」『論集 和泉式部』和歌文学会編 笠間書院 1988

リーチ・ジェフリー・N./ショート・マイケル・H.『小説の文体』笈壽雄監修 研究社 2003

渡辺実『平安朝文章史』筑摩学芸文庫 筑摩書房 2000

Booth, Wayne C. (1961) *The Rhetoric of Fiction*. Chicago: Chicago University Press.

〔『フィクションの修辞学』米本弘一他訳 白馬書房 1991〕

Clark, Herbert H. (1996) *Using language*. New York: Cambridge University Press.

Miller, Robin Feuer (1981) *Dostoevsky and The Idiot Author, Narrator, and Reader*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

出典

大津有一校注『伊勢物語』岩波文庫 岩波書店 2003

藤岡忠美『完訳日本の古典 24 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記』小学館 1984